

研究員 の眼

タブー・トレードオフへの対処 環境問題への取り組みには心理学の知見も必要 !?

保険研究部 主席研究員 篠原 拓也
(03)3512-1823 tshino@nli-research.co.jp

人が日々活動をしていくと、さまざまなトレードオフに行き当たる。トレードオフとは、何かを達成しようとするのと別の何かを犠牲にしなければならない、という関係を指す。つまり、両者は両立しえないこととなる。

いくつか例を挙げてみよう。大きなところでは、国の金融政策で、短期的な景気拡大と中長期的な経済成長の間のトレードオフ。環境政策で、経済発展と環境保護のトレードオフなどが問題とされやすい。

企業では、商品・サービスの品質と価格や、品質と納期のトレードオフ。経営判断におけるリスクとリターンや、リターンとコストのトレードオフなどが挙げられる。そもそも企業活動とは多くのトレードオフをさばいていく活動、と言っても過言ではないだろう。

個人のレベルでも、多くの人が、消費と貯蓄、キャリア形成と私生活の充実、健康維持と嗜好品の摂取(喫煙や飲酒)、活動時間と睡眠時間の確保等、さまざまなトレードオフを日常的に経験している。

トレードオフの中には、心理学で「タブー・トレードオフ」と言われる特殊なものもある。今回は、これを含めて、トレードオフへの対処について見ていこう。

◇ トレードオフには3つのタイプがある

人が経験するトレードオフにはさまざまなものがある。ストックホルム大学ストックホルム・レジリエンス・センターの研究者を中心としたチームがまとめたペーパー^(*)によると、トレードオフは、そこに含まれる価値によって3つのタイプに分けられるという。

(*1) “Evaluating taboo trade-offs in ecosystems services and human well-being” Tim M. Daw, Sarah Coulthard, William W. L. Cheung, Katrina Brown, Caroline Abunge, Diego Galafassi, Garry D. Peterson, Tim R. McClanahan, Johnstone O. Omukoto, and Lydia Muny (PNAS, vol.112, no. 22, 6949-6954, 2 June 2015)

1 つ目は、金銭や利益といった世俗的な(secular)もの同士の「日常的な(routine)トレードオフ」だ。冒頭に挙げたさまざまなトレードオフの例が、これに相当する。この日常的なトレードオフには、釣り合わないような価値の衝突は含まれない。利益、コストや、そのパフォーマンスといった合理的な基準を設けて、それに基づいて評価や判断を行うことができる。

2 つ目は、神聖な(sacred)もの同士の「悲劇的な(tragic)トレードオフ」だ。究極的な例として、医療現場で、2 人の重症患者に対して 1 人分の薬剤しかない場合にどちらの患者に投与すべきか、といった状況が挙げられる。悲劇的なトレードオフには、評価が難しい事象や、重大な判断を要するものが含まれる。そのため、時間をかけて慎重に熟慮することが求められやすい。(ただし、災害医療における事故現場でのトリアージのように、短時間で判断を迫られるケースもある。)

3 つ目は、神聖なものと世俗的なものの間の「タブー(taboo)・トレードオフ」だ。例えば、ある病院の経営で、医療費支払いに懸念がある困窮者の患者を治療するか、それとも病院の収益性確保を優先して治療を断るか、といった状況が考えられる。こうした状況は、公的医療保険制度が確立している日本では起こりにくい、アメリカなどでは起きるケースがあると見られる。

タブー・トレードオフには、臓器移植を収益事業として行うこと、子どもの養子縁組の権利を斡旋売買することなどが含まれるとされる。人々は神聖な価値観を金銭と交換することを道徳的に嫌悪しがちであり、そのような提案に尻込みする。そればかりか、そうした提案を考えることにさえ嫌悪感を持つ状態になりやすいという。そのため、タブー・トレードオフの検討は、時間をかけてじっくり行われるのではなく、すぐに判断が下されがちとなる。タブー・トレードオフの判断においては、時間をかけないことが美德とされる。

◇ タブー・トレードオフは、論理や理屈の面から対応することは難しい

そもそもタブーにはどういうものがあるのか。現在ペンシルバニア大学の心理学・政治学教授であるフィリップ・テトロック氏は、過去の著述^(*2)のなかで、タブーを 3 分類して説明している。

(*2) “Thinking the unthinkable: Sacred values and taboo cognitions.” Tetlock, Philip E. (Trends in cognitive sciences, 7.7, 320-324., 2003)

(1) 禁じられた基準率

物事の予測を行うために、ベイズ統計が行われることがある。ベイズ統計では、既に予測済みの確

率を、新たな事象の発生という追加情報を用いて更新していくというスタイルで予測を進めていくものだ。

この予測を行うための基準率として、人間のグループについて一般化した確率を置くことがある。例えば、犯罪発生率の予測において、特定の人種や性別に対して、基準率を置く場合がある。しかし、その設定は人種差別や性差別を正当化することにつながる可能性があり、タブーとされることがある。

(2) 異端視される反事実

歴史研究などにおいては、史実の因果関係について検討を行う際に、「反事実の仮定」を置くことがある。これは、「もし〇〇だったら、この史実はどう変わっていただろうか」といった検討である。

この反事実の仮定に、タブーが入り込むことがある。例えば、ある宗教で、「もし聖典が間違っていたら」とか「聖人の発した言葉が嘘だったとしたら」といった仮定を置くことが、これに相当する。こうした仮定は、当事者にとっては、それを置くこと自体がタブーとされる。

(3) タブー・トレードオフ

宗教心や生命、生業などの神聖なものと、金銭やコスト、利便性など世俗的なものとの間で、どちらを優先するかを検討することを指す。

テトロック氏の説明によれば、タブー・トレードオフについては最終的に正しい判断がなされたとしても、熟慮して検討に一定の時間を要したこと自体が、人々の道徳的な怒りの対象になるとしている。

また、タブー・トレードオフは、社会を汚染していくという。タブー・トレードオフは非難せずにとただ観察しているだけでも、(当事者にとっては)タブーに加担していることになる。

このように、タブー・トレードオフは「タブー」という人間の心理に根差したものであるため、論理や理屈の面から対応していくことは難しい。

◇ 金銭で解決することは、人々のタブー・トレードオフの感情に火をつけることも

このタブー・トレードオフが、近年注目されるようになっている背景に、気候変動問題やエネルギー問題などの長期に渡る重大な問題を、経済などの合理性の面だけから解決しようとするものの課題が懸念されるようになったことが挙げられる。

心理学者でロンドン・スクール・オブ・エコノミクス教授のジェレミー・ギンジェス氏らが行ったイスラエルとパレスチナの紛争に関する 2007 年の研究^(*)によると、ヨルダン川西岸などの紛争地

域の所有権や、パレスチナ難民が強制的に退去させられた村に戻る権利などの重要な問題に対してイスラエル人とパレスチナ人は、ある種の神聖な価値観を持っている。その価値観を妥協するために金銭を提供されることは、両者の怒りを呼び、問題解決への逆効果になるとしている^(※4)。

(※3) “Sacred bounds on rational resolution of violent political conflict” Jeremy Ginges, Scott Atran, Douglas Medin, and Khalil Shikaki (PNAS, vol.104 no. 18, 7357-7360, 1 May 2007)

(※4) “The Psychology of the Taboo Trade-Off – Surprising insights into “sacred values,” and what they mean for negotiation” Adam Waytz (Scientific American, 9 March 2010)

また、2020年2月1日の日本経済新聞のコラム^(※5)では、日本での原子力発電所の核廃棄物の地層処分(核廃棄物を加工したうえで地下深くに埋めること)の最終処分場選定にタブー・トレードオフの問題があるとしている。処分場を受け入れる住民は崇高な心に根差していると考えられるため、補助金の額を引き上げても誘致しようという気にはならない、と論じている。

(※5) 「タブー・トレードオフと地層処分」(日本経済新聞, 大機小機, 2020年2月1日)

こうしたことは、最近各地で起きている地震や台風などの自然災害の復興に伴う災害ボランティアについてもあてはまる^(※6)。彼ら彼女らは、純粋にボランティア精神から、被災した人々を手助けしたいという気持ちで被災地に入っていると見られる。そうした純粋な奉仕の気持ちに対して、安易に日当を支給しようとすれば、かえって反発を招くかもしれない。

(※6) 「ボランティアにおけるタブー・トレードオフ 自尊心に打ち勝てる金額はいかほどか？」畑啓之(アルケミストの小部屋(ブログ), 2020.2.1)

◇ タブー・トレードオフを避けるには

それでは、タブー・トレードオフを避けるにはどうしたらよいだろうか。先ほどのストックホルム大学の研究者を中心としたチームがまとめたペーパー^(※1)をもとに見ていこう。

(a) 悲劇的なトレードオフに再構成する

1つの方法として、タブー・トレードオフを悲劇的なトレードオフに構成し直すことが考えられる。タブー・トレードオフは、神聖なものと世俗的なものの間で起こるが、神聖なもの同士にしてしまえばよい、という考え方だ。

例えば、漁業の持続可能性を高めるために漁獲量を制限すること(世俗的なもの)が、漁業者の生計維持(神聖なもの)を損なう、というタブー・トレードオフがあったとする。この場合、漁業者にとっ

て「漁業の持続可能性」のような理屈で、生計の維持が損なわれることは感情的に受け入れられない。

しかし、漁獲量の制限を行わずに乱獲が起これば、漁業が持続不可能となり、将来の漁業者は生計維持が困難になる、として漁獲量制限を神聖なものに置き換えれば、悲劇的なトレードオフに再構成できる。そうなれば、この問題の早期解決にまでは至らずとも、十分な検討が行われることとなるだろう。

(b) 日常的なトレードオフに再構成する

もう1つの方法として、タブー・トレードオフを日常的なトレードオフに構成し直すことが考えられる。タブー・トレードオフは、神聖なものや世俗的なものの間で起こるが、世俗的なもの同士にしてしまえばよい、という考え方だ。

先ほどの漁業の例で言えば、漁業者の生計を、金銭的評価や費用・便益分析の形で定量的にとらえる。トレードオフを金額の面から捉えることで、日常的なトレードオフの枠組みとして問題解決を図ることが可能となる。

ただし、漁業者にとって神聖なものである生計を、世俗的なものとして金銭的に評価することは、簡単には受け入れられないかもしれない。この点をいい加減に取り扱えば、かえって対立を招いてしまう恐れがある。

(c) トレードオフの形をとらないようにする

別の方法として、トレードオフの形から脱却することが考えられる。トレードオフから外れてしまえば対立は起こらない、という考え方だ。

原発の最終処理場建設や災害ボランティアの例では、「補助金」や「日当」という名目で金銭を支給することでトレードオフが鮮明になった。例えば、これを「謝礼」として贈れば、トレードオフの感覚は幾分弱まるかもしれない。

その際は、単に名目を変えて金銭を渡すのではなく、十分なコミュニケーションを通じて、感謝の気持ちをしっかりと伝える努力が不可欠と言えるだろう。

◇ 気候変動問題ではタブー・トレードオフを考慮する必要も

以上見てきたように、タブー・トレードオフはさまざまな場面で起こる。

気候変動問題では、温室効果ガス排出削減のために、これからさまざまな環境政策がとられるだろう。その際に、いろいろな形のトレードオフが出現するものと見られる。

例えば、太陽光発電や風力発電の設備の新設を促して再生可能エネルギー発電を増加させたり、自動車のEVシフト(ガソリン車から電気自動車への移行)を促進したりする、といったことが考えられる。これに応じて、送電網の整備や充電スタンドの増設が必要となるが、経済の面から見て、そのための土地、費用、作業人員等が十分に確保できるとは限らない。この場合には、環境と経済のトレードオフが発生することとなる。

生じたトレードオフがタブー・トレードオフであった場合、当事者の感情的な対立のために、合理的な判断がなされないこともありうる。その場合は、タブー・トレードオフを避けるような検討を行うことも必要となるだろう。

このように、これからの環境問題への取組みには、物理学や工学などに基づく環境技術に加えて、心理学の知見を生かす工夫も求められる。引き続き、気候変動問題に関する各種政策の進展について、ウォッチしていくこととしたい。

(参考文献)

- (*1) “Evaluating taboo trade-offs in ecosystems services and human well-being” Tim M. Daw, Sarah Coulthard, William W. L. Cheung, Katrina Brown, Caroline Abunge, Diego Galafassi, Garry D. Peterson, Tim R. McClanahan, Johnstone O. Omukoto, and Lydia Muny (PNAS, vol.112, no. 22, 6949-6954, 2 June 2015)
- (*2) “Thinking the unthinkable: Sacred values and taboo cognitions.” Tetlock, Philip E. (Trends in cognitive sciences, 7.7, 320-324., 2003)
- (*3) “Sacred bounds on rational resolution of violent political conflict” Jeremy Ginges, Scott Atran, Douglas Medin, and Khalil Shikaki (PNAS, vol.104 no. 18, 7357-7360, 1 May 2007)
- (*4) “The Psychology of the Taboo Trade-Off – Surprising insights into “sacred values,” and what they mean for negotiation” Adam Waytz (Scientific American, 9 March 2010)
- (*5) 「タブー・トレードオフと地層処分」(日本経済新聞, 大機小機, 2020年2月1日)
- (*6) 「ボランティアにおけるタブー・トレードオフ 自尊心に打ち勝てる金額はいかほどか？」畑啓之(アルケミストの小部屋(ブログ), 2020.2.1)